

このかたちはどこからやってくるのか？

岡本さとみという若い作家がいる。この秋に東京神楽町の小さなギャラリーで初めての個展を開催した。大小合わせて10点程の立体作品が会場の床に不規則に並び、壁には10号程のペインティングが3点掛けられていた。それらの作品のどれもが作ることで喜びで満ち溢れ、その溢れ出る喜びが灑れ落ちるギリギリで定着されたかたちであり色であった。それらは彫刻や絵画といったものより、むしろ自然の中に見られる現象に似ていた。

今、彼らが目にするのできる彼女の作品はいくつかの偶然が重なり作り出されたものだ。3年にも満たない付き合いではあるが、今あらためて考えると、それはちよつとした「奇縁」と言ってもいい。彼女は2005年の春に僕が勤務する美術大学に入学してきた。1年暮修業の別科コースに所属した彼女は精神的に課題制作に取り組み、にがてな理屈系の数値もなんとかこなしていた。キャンパスで時々見かける彼女は、いつも背誦をピンと伸ばして大きく両手を振って歩いていて、朝日が充実していたのである。他のどの学生よりも生き生きして見えた。修了後も自宅や美術研究所で以前にも増して精力的に作品制作を続ける。その彼女が粘土による立体制作を手掛けることで自身の世界をより豊かに変化させていくこととなる。それまでの作品はほとんどが平面であった。それはそれで魅力的なものであったが、いつも何かとりの無さというものがつまっていた。とにかく彼女は作り続けるのだ。もし制限のない永遠に続くキャンパスがあったら、おそらく彼女は絶えがなくなるまでずっと働き続けるだろう。その点、立体には物理的な制約がある。素材と重力、斥力の格闘から逃れることは許されない。そのことが彼女の作り続けることにも制約を与える。

その制約が彼女の「作り続ける」を自然(現象)と結び、結果的に造形物へと変質させる。もともと彼女の「作り続ける」は自然現象に近い。樹木が光を求めて根を物理的な限界点まで伸ばすように、彼女は眼界まで作り続ける。物理的な限界点が樹木に樹木というかたちを与えているように、彼女の「作り続ける」に彼女の作品というかたちを与える。僕は彼女の立体作品を自然の造形物を見るように安心してゆくりと鑑賞する。360度ぐるりと回って色々な角度から眼め、近くに寄ってでも覗きこむことができる。また、彼女の見るこの自由さや、時間の概念と行為に対する無意識の自己規制が人間の持つ能力を押し込めているのではと考へ、そしてあることに気づいた。もうずいぶん長いことこんな安心して美術作品を鑑賞していなかったことに。



凝視する。いつまで見ている

彼女と出会ってからずっと笑の顔の中に溜まってきたモヤモヤがあった。それは「彼女の作り出すものを作品と呼んではいいのか？そして彼女に対して作家という言葉をはたしてふさわしいの存するか？」という疑問だ。現代の美術や表現という文脈で使われる「作品」「作家」という言葉が彼女の作り出すものを見え方や、存在するか？という価値、そして彼女自身の存在のありかたを定める危険性が少なからずあるように思えるからだ。彼女の言葉は全てこちら側のもの、あらゆる根を踏むことにはなっていて難しいのだろう。

(伊勢克也)



「髪を束ねる人」石膏に着色 2007